



中国人日本語学習者における語彙的・統語的複合動詞の習得：「～出す」、「～切る」の場合

金, 蘭

(Citation)

国際文化学, 26:93-104

(Issue Date)

2013-03-25

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD01)

<https://doi.org/10.24546/81004805>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81004805>



中国人日本語学習者における語彙的・統語的複合動詞の習得

—「～出す」、「～切る」の場合—

A Study on Chinese Learner's Acquisition of Lexical and Syntactic Compound Verbs:

With the Case of '～dasu' and '～kiru'

金 蘭

JIN Lan

概要

本稿では中国の大学で学んでいる中上級レベルの学習者 53 名を対象に、複合動詞の中で特に、語彙的な側面と文法的アスペクトの側面を持っている「～出す」型、「～切る」型複合動詞を取り上げ、それぞれの習得状況について考察を行った。

主な研究方法としては、「～出す」、「～切る」型の語彙的複合動詞、統語的複合動詞を抽出し、学習者に複合動詞を使って実際にどのような文を産出するか、またどのような誤用が見られるのかを明らかにする文産出テストを行い、分析した。

分析の結果、「～出す」型複合動詞の場合は語彙的複合動詞のほうが統語的複合動詞より正答率が高く、習得が進んでおり、「～切る」型複合動詞の場合は統語的複合動詞のほうが語彙的複合動詞より正答率が高く、習得が進んでいることが明らかになった。また、語彙的複合動詞においては、慣用句的な用法を持つ複合動詞による誤用が顕著で（「王さんは、大きな石を持って、汽車に投げ出した」、「高校で学生とけんかして相手の手を打ち切った」など）あった。統語的複合動詞では、前項動詞が不透明な意味を持つ複合動詞と結合する複合動詞の誤用（「人の悪口を陰り出してはいけない」など）、副詞との不適切な共起による誤用（「彼は頭がとてもいいので、先生の言ったことを全く分かり切った」など）が見られた。

キーワード

～出す、～切る、語彙的・統語的複合動詞、文産出、習得

1 はじめに

日本語では日常的な話し言葉でも書き言葉でも動作や状態を表す動詞が実に豊富に使わ

れていると言われている。周知の通り日本語表現において、動詞は基本的に文の述語として使われているほか、活用や「書きます、書きました」のようなテンス、「本を読んでいます、本を読み終わりました」などのアスペクトの文法体系ともかかわりを持ち、品詞の中でも大きな役割を果たしている。

動詞の中にはそのような「書く」、「読む」の他にも「書き出す」、「読み切る」などの「動詞＋動詞」の組み合わせの複合動詞¹⁾が存在する。日本語ではこのような複合動詞はかなり豊富であると言われている。

このような動詞と動詞を組み合わせた複合動詞による表現は、具体的な動作や状態を表すことによって、生き生きとした描写を可能にしている。例えば「逃げた」と「逃げ出した」などの複合動詞を使いこなせれば、場面に相応する表現ができることなど、複合動詞を身につけることによって、一層豊かな日本語の表現ができるようになる。姫野(1999)でも、「動詞＋動詞」型の複合動詞には、日常よく使われる語を組み合わせることによって、単動詞では表し得ないさまざまな用法や表現を作り出す効果があると指摘されている。

日本語教育においては、話し言葉中心の初級段階から書き言葉が多くなる中級以降へ進むにつれて触れる複合動詞は多くなる。森田(1978)でも、「外国人が日本語を学ぶ場合、(中略)圧倒的に多い複合動詞の波にぶつかって苦しまねばならぬ」と指摘している。

日本語学習者にとって、複合動詞は習得が難しい学習項目であると言われてきた。日本語学習者でもある筆者の経験からも、複合動詞を適切に使うことは難しい。特に、作文や論文を書く場合には述べたい内容を十分に表現しきれず、例えば、「朝日に映し出される富士山」と表現したいところを「朝日に映される富士山」としか表現できないことで、学習者の作文能力や読解能力などの向上にとっても問題になると考えられる。

なお、本稿で「～出す」、「～切る」を取り上げる理由は、「～出す」、「～切る」型複合動詞は語彙的な側面を持っているとともに、両者は「～始まる」、「～終わる」と類義関係にあり、いずれも文法的アスペクトの性質をも持っている複合動詞であり、さまざまな前項動詞と結合し、それらの意味も多義的であるため、学習者にとって習得しにくいと考えられるからである。また、複合動詞「～出す」、「～切る」は中級レベルの早い段階に学習項目として登場し、更には数多い複合動詞の中で後項動詞として、その頻度が非常に高い。

以上のことを踏まえ、本稿では、統語的・語彙的両側面を持っている「～出す」、「～切る」型複合動詞を中心にその習得²⁾について考察を行うことにする。なお、中国国内で日本語を専攻する中国人学習者が「～出す」、「～切る」の意味用法を実際にどの程度把握しているのか、また習得の上でどのような誤用あるいはどのような問題点が見られるかについて明らかにすることを目的とする。

II 先行研究

従来、日本語の複合動詞の研究は、多様な結合形式を整理しようとしたものが多く、前項動詞と後項動詞の意味関係や格支配の観点からの分類が行われてきた。複合動詞の意味用法については、多くの研究者によって様々な観点から研究がなされている。本節では主に「～出す」「～切る」の意味用法について言及のある森田(1989)、姫野(1999)を取り上げ

る。

2.1 「～出す」、「～切る」の意味に関する先行研究

森田(1989)の「～出す」の意味：

森田(1989)では「～出す」を「動詞型活用」の接尾として扱い、

㊦ 中にある事物を外側へ、表面のほうへと移し現れるようにする意から、(追い出すなど)

㊦ 新たな状態を発生させる意へと発展し、そこから、(作り出すなど)

㊦ 新たに事が始まる意へと転じていく。(動き出すなど)

「あばき出す、あふれ出す、追い出す、押し出す(一部の複合動詞だけを抜粋)」など、一般に「中側→外側／内側→表側」への移行を予想できる動詞は「～出す」が付いて㊦の意となり、「描き出す、考え出す、作り出す、捻り出す(一部の複合動詞だけを抜粋)」など、「内面→外面」の移行現象が、結果としてある新しい状況を作り、結果をあとに残す場合には、㊦の“発生”や“作成”となるとしている。さらに、「言い出す、動き出す、書き出す、泣き出す(一部の複合動詞だけを抜粋)」など、行為・作用が継続的な動作や反復動作、多数の主体によってなされる連続動作である場合には、㊦の“開始”の意を帯びるとしている。

姫野(1999)の「～出す」の意味：

それに対して、姫野(1999)では「～出す」の複合動詞の意味は「出る」と同様に「外部への移動」であるとし、その違いは、主体によって対象が移動させられることであるとしている。また、語彙的複合動詞の後項動詞として用いられる場合も、第一義的には、この「外部への移動」の意味を持つ。それが転じて、出現や物事の顕在化を表すこともある。統語的複合動詞としては「動作や作用の開始」という意味を持ち、その働きは大きいとしている。「～出す」の意味的役割を中心に次のように分類している(A～Eの記号は筆者)。

- A 外部、前面、表面への移動：引き出すなど
- B 顕在化(顕現)：映し出す、思い出すなど
- C 顕在化(創出)：作り出す、描き出すなど
- D 顕在化(発見)：探し出す、洗い出すなど
- E 開始のアスペクト：雨が降り出すなど

このように、姫野(1999)では、外部、前面、表面への移動を表すAに相当する語が最も多いとし、更に主体の移動を表すもの「自動詞」と対象の移動を表すもの「他動詞」に分けられると指摘している。また、外部、前面、表面への移動を表すAは対象を外部や表面に出現せしめ、人の目に触れさせることを表し、対象の空間的移動は伴わず、隠れていたものが覆いを取り除かれて姿を現す、無から有が生み出されるというように出現の様相にはバラエティーがある。前項動詞の意味特徴によってBの「顕現」、Cの「創出」、Dの「発見」の三つに分けている。B、C、Dは、文脈によってはいずれともとれる場合があるが、一応基本的な意味を中心に分けたものであると指摘している。開始のアスペクトを示すEは、サ変動詞をはじめ多くの動詞に接続するため生産性が非常に高いとしている。

森田(1989)の「～切る」の意味：

森田(1989)では、「～切る」の意味について、次のように指摘している。

- ㊦. “切り離す” 行為そのものを表す。(噛み切る、断ち切る、ねじ切るなど)
- ㊧. 完全にその事柄を終える。“完了”の意となる。(読み切る、売り切るなど)
- ㊨. それ以上付け加える必要はない、これで完全だ、その行為を自信を持って行うのだという強い言い方となる。(「はっきり言い切った」、「思い切って行う」など)
- ㊩. 終了意識がそれ以上は進まないという限界意識、完全に行き着く限度まで達したという強調意識となり、“非常に”、“完全に”の意を添えることにもなる。(「困り切る」、「澄み切った秋空」など)

このように、森田(1989)では「～切る」の意味を「動詞型活用」の接尾として扱い、先行動詞が物を切る方法を表す動作動詞の場合、「噛み切る、叩き切る、断ち切る、ねじ切るなど」のように“切り離す”行為そのものを表す㊦となり、本動詞の意味そのままであるとしている。

また、「切る」が“継続する事柄にけりをつけて終結する行為”を表すところから、他の動詞に付いた場合も、“完全にその事柄を終える”という㊧“完了”の意となるとしている。更に、それが㊨それ以上付け加える必要はない、これで完全だ、その行為を自信を持って行うのだという、強い言い方となる。「はっきり言い切った」「思い切って行う」「警視庁では犯人逮捕に踏み切った」のような語を造るとしている。㊩は例えば、「みんなの反対を押し切って強行する」、「困り切る」、「澄み切った秋空」、「煮え切らない態度」など、終了意識がそれ以上は進まないという限界意識、完全に行き着く限度まで達したという強調意識となり、“非常に”、“完全に”の意を添えることにもなると指摘している。

姫野(1999)の「～切る」の意味：

それに対して、姫野(1999)では、「～切る」の複合動詞を「～ぬく」「～とおす」とともに完遂を表す複合動詞類として挙げて説明している。

「～切る」は、本動詞の「切る」の意味で用いられる語彙的複合動詞の場合と、接辞的に統語的複合動詞として用いられる場合に大別されると主張した。具体的には次のように分類している(A～Dの記号は筆者)。

- A 切断 (鉄棒を焼ききる、かききる、断ちきるなど)
- B 終結 (難局を乗りきる、思いきる、踏みきるなど)
- C 完遂 (走りきる、燃えきる、読みきるなど)
- D 極度 (澄みきる、疲れきる、困りきるなど)

「A 切断」は物理的切断を表す場合で、前項動詞はその方法や様相を示し、「～して切る」、あるいは「～するように切る」と言い換えられると指摘している。「B 終結」は抽象的切断を表す場合で、人が目的を完遂するため、余分なことは切って捨て、決断したことに踏み出すという意味を共通に持っているとしている。「C 完遂」は継続動詞と結合して「完遂」を表すとしている。「D 極度」のグループの前項動詞は、瞬間動詞であるが、その中でも変化の程度を持ち、結果の状態が残るもの、いわゆる結果動詞の類であるとしている。

このように姫野(1999)では「～切る」で、前項動詞が継続動詞の場合は「完遂」、瞬間動詞の場合は「極度」としているが、その継続動詞と瞬間動詞の区別は容易ではない。しか

し、姫野(1999)では「語彙的複合動詞」「統語的複合動詞」の両方から意味分類が行われているので、本稿ではその意味分類に基づいてテスト問題を作成した。

2.2 習得に関する先行研究

複合動詞に関する習得研究は、それほど多くは行われていない。

寺田(2001)では、影山(1993)の複合動詞には「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」の二種類があるという考え方を踏まえ、両者は異なるメカニズムによって習得されるという仮説を立て、帰国子女を対象に複合動詞の習得に関する調査を行った。

「統語的複合動詞」は規則を適応していく語形成規則 default タイプ³⁾であり、「語彙的複合動詞」は頻度と類推によって長期記憶に載せる(=Mental lexicon にリストして覚える)タイプであろうとする習得仮説を立て、帰国子女を対象に、複合動詞の作成、理解、正誤判定テストを用いて調査を行った。その結果、予想どおり海外滞在年数の多寡に関わらず「統語的複合動詞」は誤りが少ないのに対し、「語彙的複合動詞」は海外滞在年数が長いほど誤用が増えたと報告している。この寺田(2001)の研究は、第二言語としての日本語の複合動詞の習得研究にとって大きな示唆を与えた。

近年、日本語学習者の多様化とともに、日本語教育において語彙習得の視点から学習者の複合動詞の習得研究がなされてきた。日本語学習者を対象として、次のような研究がなされた。

松田(2002、2004)では、超上級学習者を対象に「～こむ」の習得状況を考察し、認知意味論の観点から「コア図式」を「～こむ」に応用して意味習得の面に着目した研究を行っている。

陳(2006)では、日本語複合動詞の様々な語義の中でプロトタイプ性の高いもののほうが、早期に習得されるとし、中国人日本語学習者を対象とした「～あう」「～こむ」型複合動詞の理解度調査を行った。

白(2007)では、韓国人学習者を対象に様々な「～出す」を含む文の許容性判断テストを実施した。その結果、韓国人学習者は特有の誤用パターンが見られたと指摘し、日本語の「～出す」とそれに相当する韓国語の「～내다」(日本語の「～出す」に相当)の意味のずれに影響された可能性があるとして指摘している。

以上のような先行研究があるが、学習者が産出した運用データを利用して、使用状況を解明し、陥りやすい誤用に関する実証的な習得研究はそれほど進展していないというのが現状である。

複合動詞は語彙と文法の領域に跨っていて、複合動詞の習得は語彙の習得と文法項目の習得という両側面を持っている。その中でも「～出す」型複合動詞と「～切る」型複合動詞は、この語彙的側面と文法的側面が特徴的であり、日本語教育においても重要な学習項目となっている。

従って本稿では、「～出す」、「～切る」型の複合動詞を対象として、中国人日本語学習者の習得状況について考察する。

III 研究方法

3.1 調査の対象者

中国の東北部の大学で日本語を学んでいる中上級レベル⁴⁾の学習者 53 名を対象に文産出テストを行った。

学習者は大学で初めて日本語を学び、日本での滞在歴がなく、日本語学習時間が 500 時間以上であり、複合動詞の学習が終わっているいわゆる中上級レベルに相当する。

大学での日本語の授業は「精読」を中心に「視聴説⁵⁾」、「会話」、「聴解」、「作文」などの授業を受けてきた。「精読」は主要科目として履修しており、五十音図の導入から始まり、文法項目を中心に学ぶ授業であり、『現代日本語』(胡振平主編 上海外語教育出版社、以下、精読教材と記す)をテキストとして使っている。

3.2 調査の内容および方法

テスト問題に使用した「～出す」、「～切る」の複合動詞は、精読教材、『日本語能力試験出題基準』、『NTT データベースシリーズ日本語の語彙特性』(天野・近藤 2000、以下『NTT データベース』と記す)を用いてリストアップした。文産出テストで提示した複合動詞 30 語は姫野(1999)の意味分類に基づいて、下記の三つから意味ごとに総合的に取り出したものである。

- i. 精読教材では全 6 冊に出てくる「～出す」、「～切る」型の複合動詞
- ii. 『日本語能力試験出題基準』の 1 級文字・語彙リストから取り出した「～出す」、「～切る」型の複合動詞
- iii. 書き言葉のデータである『NTT データベース』を用いて「～出す」、「～切る」の使用頻度を調べ、使用頻度が高い順から低い順へと複合動詞を頻度順に抽出した。(『NTT データベース』は 14 年間に発行された朝日新聞の記事データであり、ニュース記事のほか経済面、文芸面など多種のジャンルにおける記事が含まれ、広い分野で使用される語が現れると考えられる。)

以上の i、ii、iii で抽出した 30 語の「～出す」型複合動詞と「～切る」型複合動詞を姫野(1999)の意味分類および影山(1993)の統語的・語彙的複合動詞の判断テストを参考にリストアップした。

3.3 テストで使用した複合動詞

30 語の「～出す」、「～切る」型の複合動詞を提示し、短文を作らせる文産出テストを行った。提示する複合動詞は、精読教材に出ている複合動詞、『日本語能力試験出題基準』でリストアップされている複合動詞、『NTT データベース』で使用頻度が高い「～出す」型複合動詞と「～切る」型複合動詞、姫野(1999)の「～出す」、「～切る」の意味分類に基づいて、総合的に抽出した。抽出した語は以下の通りである。

表 1-1. 文産出テストで使用した「～出す」型の複合動詞

意味 A : 移動	*#差し出す、*#逃げ出す、*#追い出す、*#投げ出す、*乗り出す
-----------	-----------------------------------

意味 B：顕現	*#思い出す、#言い出す、打ち出す
意味 C：創出	*生み出す、*作り出す、描き出す
意味 D：発見	見出す、割り出す、探し出す
意味 E：開始	*滑り出す、*陰り出す、動き出す

（*は精読教材に出ている複合動詞で、#は『日本語能力試験出題基準』の 1 級文字・語彙リストに出ている複合動詞である）

表 1-2. 文産出テストで使用した「～切る」型の複合動詞

意味 A：切断	#押し切る、#噛み切る、断ち切る
意味 B：終結	#打ち切る、*#思い切る、*乗り切る、言い切る
意味 C：完遂	*#売り切る、逃げ切る、出し切る
意味 D：極度	*#張り切る、*分かり切る、疲れ切る

（*は精読教材に出ている複合動詞で、#は『日本語能力試験出題基準』の 1 級文字・語彙リストに出ている複合動詞である）

「～出す」型複合動詞で意味 E の開始は統語的複合動詞であり、それ以外は語彙的複合動詞である。「～切る」型複合動詞では、切断を表す意味 A と終結を表す意味 B の複合動詞が語彙的複合動詞であり、完遂を表す意味 C と極度を表す意味 D の複合動詞は統語的複合動詞である。

文産出テストの問題例は次のようなものである。

次の語を使って短文を作ってください。（短文は二つ以上の文からできていても構いません。辞書は使わないこと。）

1. 差し出す _____

2. 押し切る _____

なお、語彙的複合動詞と統語的複合動詞の判断基準は影山(1993)の語彙的複合動詞と統語的複合動詞を区別するテストを参考にして分けた。

影山(1993)では、以下のテストを用いて統語的複合動詞と語彙的複合動詞を区別している。

①代用形：

そうし始める(統語的複合動詞)／*そうし上がる(語彙的複合動詞)

②主語尊敬語：

お歌いになり始める(統語的複合動詞)／*お受けになり取る(語彙的複合動詞)

③受身形：

殺されかける(統語的複合動詞)／*押され開く(語彙的複合動詞)

④サ変動詞：

投函し忘れる(統語的複合動詞)／*ジャンプし越す(語彙的複合動詞)

⑤重複形：

鍛えに鍛え抜く(統語的複合動詞)／*注ぎに注ぎ込む(語彙的複合動詞)

IV 結果と考察

文産出テストでは、姫野(1999)の意味分類に基づいて、「～出す」、「～切る」型複合動詞の30語を学習者に提示し、短文を作るように求めた。提示された複合動詞を使って正しい文が作れるかどうかを考察しようとしたもので、学習者の「～出す」、「～切る」型複合動詞の実際の運用力を測定することを目的としている。文産出テストで取り上げた30語の複合動詞の正答率は次のようになっている。

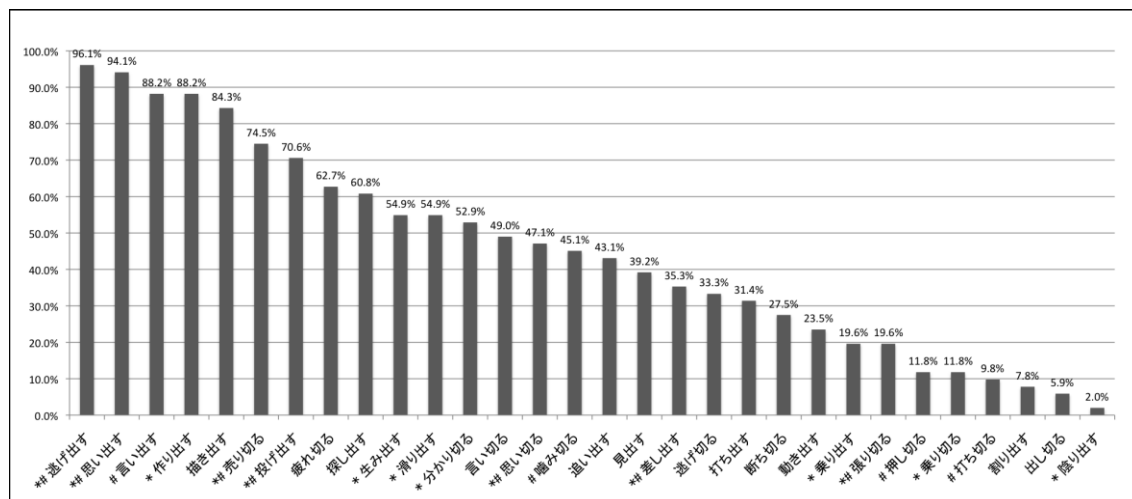


図1. 文産出テストにおける30語の正答率

図1から学習者の文産出テストの結果を全体的に考察すると、文産出テストの平均正答率は44.8%であり、50%を下回っていた。このことは全体的に見ると学習者がこれらの複合動詞の習得において、運用の面、特に複合動詞を使って文を産出するという点では、それほど習得していないことが窺える。正答率第1位の「思い出す」と第2位の「逃げ出す」は両方とも学習者が使用していた精読教材の語彙リストに提示されている語で正答率は高い。しかし、「差し出す」、「張り切る」などは同じ精読教材で学んだにもかかわらず、正答率は低かった。従って、学習者は精読教材で学んだとしても正答率が必ずしも高くはないし、「描き出す(84.3%)」、「疲れ切る(62.7%)」のように未習の語であるとしても正答率が低いというわけではない。

なお、学習者の産出データを分析した結果、「～出す」型複合動詞では語彙的複合動詞の平均正答率は59.0%で、統語的複合動詞の平均正答率は26.8%であった。「～切る」型複合動詞の場合は語彙的複合動詞の平均正答率が28.8%で、統語的複合動詞の平均正答率が41.5%であった。つまり、「～出す」型複合動詞の場合は語彙的複合動詞のほうが統語的複合動詞より正答率が高く、習得が進んでおり、「～切る」型複合動詞の場合は統語的複合動詞のほうが語彙的複合動詞より正答率が高く、習得が進んでいると考えられる。

文産出テストでの「～出す」型複合動詞の意味ごとの平均正答率は次のようである。

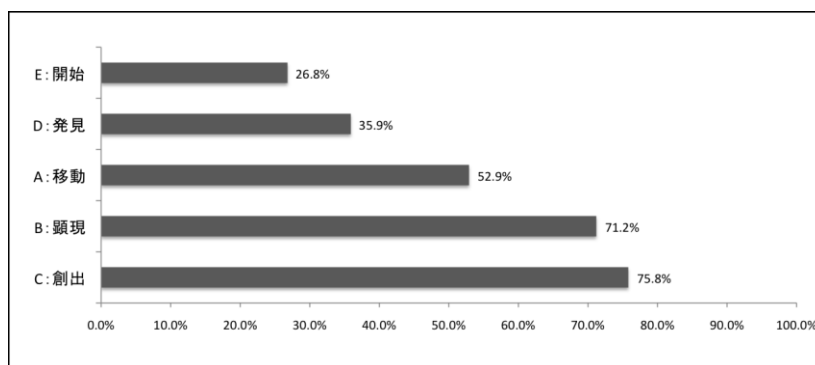


図2. 文産出における「～出す」の意味ごとの平均正答率

図2から分かるように、「創出」の意味を表す「～出す」型複合動詞の平均正答率が75.8%と最も高い。このことから、「創出」の意味を表す「～出す」型複合動詞は学習者にとって意味の理解がよくできていて、文産出能力も他の意味用法に比べ高く、習得が進んでいた。

「創出」の意味の「作り出す」、「描き出す」は文産出テストで正答率がそれぞれ88.2%、84.3%と高く、「創出」の意味用法は学習者にとって習得しやすい意味用法であると言える。

中国語にも「～出 chu」という表現があり、「走出教室 zou chu jiao shi (歩いて教室を出る)」という場所の移動を表す外に、「她画出了油画 ta hua chu le you hua (彼女は油絵を描き出した)」、「她写出了小说 ta xie chu le xiao shuo (彼女は小説を書き上げた)」のように「ある新しい物事の創作や成果を上げる」という「創出」と似た意味を持っている。このことから、「創出」の意味用法が学習者にとって習得しやすいのであろうと考えられる。

それに対して、「開始」の意味の平均正答率は26.8%と最も低く、学習者にとっては習得しにくい意味用法であると考えられる。習得しにくい原因としては、中国語の「～出 chu」という表現は移動や創出の意味を持っているが、「開始」の意味を持っていないからではないかと考えられる。

文産出テストでの「～切る」型複合動詞の意味ごとの平均正答率は次のようである。

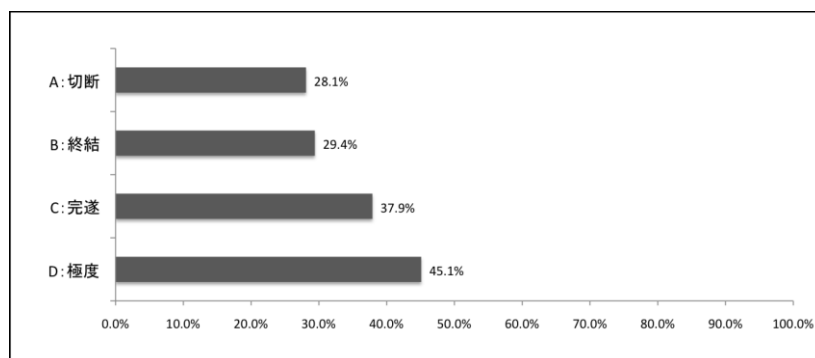


図3. 文産出における「～切る」の意味ごとの平均正答率

図3から分かるように、「極度」の意味を表す「～切る」型複合動詞の平均正答率が45.1%と最も高い。このことから、「～切る」型複合動詞の中で「極度」の意味を表す複合動詞は学習者にとって文産出能力も他の意味用法に比べ高く、習得が進んでいることが分かる。

「極度」の意味の「疲れ切る」は文産出テストで正答率が62.7%(「売り切る」の74.5%に続き二番目に高い)と比較的高かった。「極度」の意味用法については学習者の使用している精読教材に用法の説明が記載されており、学習者は「極度」の意味用法については習得が

できたと言える。

それに「切断」の意味の平均正答率は28.1%と最も低く、学習者にとっては習得しにくい意味用法ではないかと考えられる。

なお、「～出す」、「～切る」型複合動詞の文産出テストでは、学習者がそのような複合動詞でどのような文を産出するのか、産出による誤用がどのようなものなのか、そのような誤用を産出した原因は何かを誤用分析を通して明らかにした。

分析の結果、「～出す」型複合動詞と「～切る」型複合動詞の文産出には次のような傾向が見られた。

I. 学習者は前項動詞が多義的な意味を持つか、或いは意味が分かりにくい前項動詞と結合する複合動詞の誤用が顕著で、習得の難しいことが明らかになった。そのため、「先生は私の誤ったところを差し出した。」、「ケーキから父親の一部分を割り出す。」のような誤用を多く産出していた。

II. 「投げ出す」、「乗り出す」、「打ち切る」、「張り切る」などの慣用句的な用法を持つ複合動詞に関しては習得できず、「王さんはバスケットボールが上手だ、いつも素晴らしいボールが投げ出した。」、「仕事でバスに乗り出して会社に行った。」、「高校で学生とけんかして相手の手を打ち切った。」、「このポスターをすっかり張り切って下さい。」の誤用文のように前項動詞だけの意味で捉えて文を産出する傾向が強かった。

特に、慣用句的な用法を持つ複合動詞についてはほとんど習得できていなかった。なお、「前項動詞+出す(切る)」の意味について「前項動詞」の意味だけで捉え、それを適用することが誤用につながっていた。

III. 「打ち出す」、「乗り出す」、「思い切る」などは「昨日わが国がもう一つのロケットを打ち出す(→打ち上げる)ことが成功した。」、「何かあったら黙っていないで、かならず私に打ち出して(→打ち明けて)ください。」、「困難を乗り出す(→乗り越える)ために、団結は一番だ。」、「今度はちゃんと頑張って優勝すると思い切る(→思い込む)。」の誤用文のように、同じ前項動詞と結合する他の複合動詞との混同による誤用も見られた。

IV. その他に「いっしょうけんめい勉強しほかの学生たちを追い出そうとする。」のような「追い出す」の顕著な誤用、「彼は頭を探し出して、『はい』と応答します。」のような漢字の影響による誤用、「全く分かり切った」、「すぐに分かり切った」のような「～切る」型複合動詞の副詞との共起の不適切による誤用なども見られた。

V おわりに

考察の結果、「～出す」型複合動詞の場合は語彙的複合動詞のほうが統語的複合動詞より正答率が高く、習得が進んでおり、「～切る」型複合動詞の場合は統語的複合動詞のほうが語彙的複合動詞より正答率が高く、習得が進んでいることが明らかになった。

また、学習者の統語的・語彙的両側面を持っている「～出す」、「～切る」型複合動詞の運用の面における習得状況や意味ごとの習得状況などが明らかになった。

更に、語彙的複合動詞においては、慣用句的な用法を持つ複合動詞による誤用が顕著で(「王さんは、大きな石を持って、汽車に投げ出した」、「高校で学生とけんかして相手の手

を打ち切った」など)あった。統語的複合動詞では、前項動詞が不透明な意味を持つ複合動詞と結合する複合動詞の誤用(「人の悪口を陰り出してはいけない」など)、副詞との不適切な共起による誤用(「彼は頭がとてみいので、先生の言ったことを全く分り切った」など)が見られた。

最後に、今後の課題として研究方法およびデータの質的量的な再検討を行うとともに、学習者の以上のような習得状況に基づき、日本語教育現場においてどのように応用したらよいのかなどをも視野に入れて考えていきたい。

(神戸大学国際文化学研究科博士後期課程)

注

- 1)新美他(1987)では、「合成語に属している複合語は最少二つの実質的形態素が結合して、新しい文法的機能と意味を持つ大きな単位を形成する時のまとまりのことである。その実質的形態素二つともが動詞であるか、あるいは後部形態素が動詞であって、形成された複合語自体が一つの動詞としての文法的性質を持つもの」を複合動詞と定義している。
- 2)言語の習得及び第二言語における習得に関しては、研究者によりいろいろな定義がされていた。本稿における複合動詞の習得は、複合動詞を使って正しく文が作れるかという文産出能力とある文脈の中で正しく理解できるかという理解能力のことである。
- 3)規則を適用していくタイプ。(寺田はPinkerらの英語の動詞過去形の習得は①規則を適用していく default タイプ、②頻度と類推による連想記憶タイプ、③そのまま丸ごと覚える、の異なるプロセスで習得するという指摘から仮説を立てた)
- 4)「～出す」、「～切る」が既習である3年生と4年生53名である。なお、中国国内では、大学で日本語を専攻として学んでいる場合、一般的に3年生の時に日本語能力試験1級を受ける。本稿では、このような3年生と4年生を中上級レベルと見なす。
- 5)大学での日本語の授業は「精読」を中心に「視聴説」、「会話」、「聴解」、「作文」などの授業がある。「視聴説」の授業では、日本人の日常生活の場面や職場の場面が収録されているビデオを見てその内容について話し合う授業である。

参考文献

- 天野成昭・近藤公久編著(2000)『NTT データベースシリーズ日本語の語彙特性』第7巻, 三省堂
- 李暲洙(1997)「中間的複合動詞『きる』の意味用法の記述: 本動詞『切る』と前項動詞『きる』、後項動詞『一切る』と関連づけて」『世界の日本語教育』7, 219-232
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 陳曦(2006)「中国人学習者における複合動詞の習得に関する一考察: 学習者の作文産出に基づいて」『ククロス: 国際コミュニケーション論集』3, 1-15
- 寺田裕子(2001)「日本語の二類の複合動詞の習得」『日本語教育』109, 20-29
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版

- 照山法元(2009)「日本語教育における複合動詞『～出す』の学習語彙の選定」『早稲田日本語研究』18, 24-35
- 新美和昭・山浦洋一・宇津野登久子(1987)『外国人のための日本語 例文・問題シリーズ4』荒竹出版
- 野村雅昭・石井正彦(1987)『複合動詞資料集』国立国語研究所報告書
- 姫野昌子(1999)『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房
- 白以然(2007)「韓国語母語話者の複合動詞『～出す』の習得：日本語母語話者と意味領域の比較を中心に」『日本語教育論集：世界の日本語教育』(国際交流基金)17, 79-91
- 松田文子(2000)「日本語学習者による語彙習得」『世界の日本語教育』10, 73-89
- 松田文子(2002)「日本語学習者による複合動詞『～こむ』の習得」『日本語教育論集 世界の日本語教育』12, 43—59
- 松田文子(2004)『日本語複合動詞の習得研究—認知意味論による意味分析を通して』ひつじ書房
- 森田良行(1978)「日本語の複合動詞について」『講座日本語教育』14, 早稲田大学語学教育研究所, 69-86
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店

『新版日本語教育事典』大修館, 2005

『日本語能力試験出題基準【改訂版】』国際交流基金・日本国際教育支援協, 2006

『現代日本語』胡振平主編 上海外語教育出版社, 2003

『広辞苑【第六版】』岩波書店, 2008